

# 時潮の流転

(昭和十四年竄歌)

望月真三郎君 作歌

竹村伸一君 作曲

一

時潮の流転涼々と  
四季乾坤に巡り立つ  
去来常なく人変り  
有情無為の時鐘の音に  
孤城の爽春は未だ浅し

二

遠く流離の春に来て  
此の高楼に春愁ひつつ  
郭公鳥の鳴くさへも  
多感の児等の情懷熱く  
懷古の涙溢るべし

三

真日澄む北の蒼穹はるか  
飛燕ひとたび音に鳴けば  
桃李の華影は瘦せゆきて  
あはれ旅寝の若き遊子よ  
帰南の郷愁しきりなり

四

夕陽西に落ち行けば  
白樺林朱に染み  
暮秋の颯は飄々と  
時艱を憂ふ国の子の  
悲腸の声に似たるかな

五

北斗地平に揺曳ぐとき  
天地の四大霜と凝り  
四寮の高夢も凍てつきて  
ほがらほがらの朝ぼらけ  
帰雁の孤影よ月に飛ぶ

六

明日別れ行く旅人の  
春の夕べの宴遊かな  
かへらぬ絢夢をしのびつつ  
生命の故郷と慨嘆きしも  
すでに三星霜の草枕